「明治天皇すり替え説」から考える「南北朝正閏論」2012.4.14

「鹿島説幕末王朝交代論」

「裏切られた三人の天皇 ── 明治維新の謎」の紹介文で次のように付されている。

本書のなかで著者が展開する史観は三人の天皇、すなわち孝明天皇、その子睦仁、及び実は大室寅之祐の明治天皇は、或いは明治維新を推進した岩倉具視や木戸、伊藤、山縣、大久保たちに暗殺され、或は裏切られた悲しい存在であったという事実である。まず孝明天皇は長州藩の忍者部隊によって暗殺され、その子睦仁も即位後直ちに毒殺された。そして、睦仁の身代わりになった明治天皇は実は南朝の末孫という長州力士隊の大室寅之祐であり、孝明天皇の子ではなかったというのである。

「明治天皇の出自疑惑」については概要次のように整理できるようである。

明治天皇の出自及び王統系譜に関する疑問が発せられている。これについては早くより識者が個別に指摘し続けてきていたところ、１９９９年、鹿島昇・氏が「裏切られた三人の天皇 ─ 明治維新の謎」で精緻に論証したことで衝撃を与えることになった。鹿島氏は、同書に於いて、概要「孝明天皇は、幕末の倒幕・佐幕両派の抗争過程で、岩倉具視と伊藤博文ら長州志士等によって暗殺された。長州藩はその後、南朝光良親王の子孫（血統）である大室寅之祐を擁立し、孝明天皇を後継した睦仁親王（京都明治天皇）にスリ替えた」との説を唱えている。

これを仮に鹿島説とすると、「明治天皇として即位したのは、それまでの北朝系ではなく、熊沢天皇同様の南朝系の末裔にして長州藩が秘匿擁立してきた大室家の寅之祐（おおむろとらのすけ）である」ということになる。倒幕派は、「長州に住んでいた南朝の末裔と称されていた大室寅之祐を擁立し、北朝系に代えて南朝系の大室寅之祐を睦仁親王の名で以て身代わり即位させ、幕末政変で勝利するや東京遷都し、終生本物の明治天皇として振舞わせた」ということになる。

明治天皇の即位前の名前は、睦仁親王である。睦仁親王は、孝明天皇逝去後、「幼君」として擁立されたが、この睦仁親王は暗殺され、長州が仕立てた大室寅之祐が睦仁親王を騙って身分を継承した。従って、明治天皇となって即位したのは睦仁親王ではなくて大室寅之祐であるということになる（「明治天皇すり替え説」）。こうなると、「睦仁親王」と後に「明治天皇」として知られる東京明治天皇は別人であり、「皇家クーデター」が起っていたということになる。実に、明治維新とは、「明治天皇すり替えによる王朝交替だった」ことになる。

「明治天皇替え玉説」の根拠として、睦仁親王時代の即位前の写真と即位後の明治天皇時代写真の様子の違いが挙げられている。一言で云えば、即位前は腺病質な姿が語られているのに即位後は威風堂々としており、とても同一人物とは思えないという説である。

つまり、倒幕派は、当初は攘夷派であったが途中で時代の流れに合わせて「開国維新」に転換した。ところが、孝明天皇は、この時代の流れを拒否し、「鎖国攘夷」に固執しつつ「公武合体的佐幕」を志向した。孝明天皇急逝後を後継したその皇子の睦仁親王（京都明治天皇）も孝明天皇と同じ路線を踏襲した為、共に暗殺された。

補足すれば、孝明天皇の住む御所並びに京都市中の治安維持の総責任者・京都守護職に、会津藩主・松平容保（かたもり）が当たった。この容保公も孝明天皇の信任を得ていた。つまり、幕末維新過程で、最後まで「逆賊」として抵抗した会津松平家は、孝明天皇以来の忠義を貫いたことになる。というか、薩長の不義を告発し続けていたことになる。

鹿島 舜　大室天皇との出会い

１９８７（昭和６２）．１０月、鹿島氏は、日本神道・歴史研究の権威である吾郷（あごう）清彦氏の紹介で、山口県柳井（やない）市田布施町麻郷（おごう）に在住する大室近祐（おおむろちかすけ、平成８年没）氏をを訪れた。この時、大室近祐氏はすでに８０歳を越えていたが、「私は南朝の流れを引く大室天皇家の末裔であり、明治天皇は祖父の兄・大室寅之祐です」と、はっきりと語った。大室氏は、「大室寅之祐（大室氏の大叔父）が睦仁親王（孝明天皇の皇子）を殺害して明治天皇になった」と云う裏明治維新史を語り続けていた。大室氏は、地元でも「田布施の和田喜八郎（東日流外三郡誌の作者）」と呼ばれていた。

大室氏は古田武彦氏に接近したところ「私の専門外」と相手にされなかった経緯がある。鹿島氏は、この最初の訪問のときはさすがに半信半疑のようであったが、その後１０回におよぶ訪問を重ね、「皇道と麻郷」をはじめとする大量の文書を見せられることにより、しだいにこの事実を確信するようになっていった。以来二人は意気投合し、たびたび出会うようになった。大室氏曰く、「ワシの顧問弁護士」と大変気に入られていた。

鹿島氏はこれらの研究を通じて外国の学者たちとも交流を深めているが、何時までも国内で認められないことを残念がっていた。更に、「アカデミーの偽史カーテン」を開ける為に、明治維新の時に「天皇すり替え」が行われた史実を公開し、「万世一系」の虚構を証明する作業に取り掛かった。その一番手が「日本侵略興亡史」で、１９９０．４月、新国民社から刊行された。そこに至るいきさつは別紙・評論家西垣内堅祐氏の推薦文に載っている。それに続く「はじめに」は、鹿島氏本人の序文である。同書で公然と部落差別問題の原点から説き起こし解明するとともに、その正しい解決方法にまで言及している。

１９９６（平成８）年、大室近祐氏が死去し、長男の大室照元氏と次男の大室弘樹氏双方が相続問題で告訴する事態になった。鹿島氏が作成した大室近祐氏の遺言状の効力が争われた。鹿島氏は大室弘樹氏の弁護人に選任されていたが、２０００（平成１２）．１１月、「遺言書は無効」とする判決が山口地裁から下された。

鹿島 舜　略歴

鹿島 舜（かしま のぼる、1926 年 - 2001 年 4 月 24 日）は、日本の弁護士、在野の古代史研究家。
1926 年に神奈川県横浜市に弁護士を父として生まれる。早稲田大学法学部在学中に司法試験に合格し弁護士になる。弁護士業の傍ら、古代東アジア史、日本史の研究を進めて、独自の史観を展開し、多数の著作を発表した。
出版社「新国民社」を創設し、自著の多くも同社から出版したが、その事業は 2007 年に、太田龍を代表とする新国民出版社に引き継がれた。

吾郷清彦・鹿島舜 編『神道理論大系』新国民社、1984 年
鹿島舜『日本神道の謎 : 古事記と旧約聖書が示すもの』光文社 1985 年
鹿島舜『北倭記要義―倭人興亡史』新国民社、1987 年
鹿島舜『義経＝ジンギス汗 新証拠』新国民社、1987 年
鹿島舜『国史正義 : 日本建国史・日本同和史』日本同和史研究会、1994 年
鹿島舜『日本ユダヤ王朝の謎―天皇家の真相（改訂版）』新国民社、1988 年
鹿島舜『桓檀古記要義―日韓民族共通の古代史』新国民社、1990 年
鹿島舜・宮崎鉄雄・松重正『明治維新の生贄―誰が孝明天皇を殺したか 長州忍者外伝』新国民社
鹿島舜『裏切られた三人の天皇―明治維新の謎』新国民社、1997 年
鹿島舜『裏切られた三人の天皇―明治維新の謎（増補版）』新国民社
鹿島舜『倭と日本建国史』新国民社、1997 年 9 月 10 日
鹿島舜『歴史捏造の歴史―司馬遷から江沢民まで』新国民社
鹿島舜『歴史捏造の歴史〈2〉―デッチアゲの万世一系』新国民社

【大室家とは】

大室家（後大室家）は、頼山陽によって家系図が整備されている。これによると南朝系の皇室系譜になる。天皇家は南北朝動乱の後、代々北朝の流れが継いでいた。南朝は９９代の後亀山天皇で絶え、歴史上では滅亡したことになっている。しかし実は、南朝である後醍醐天皇の子孫が正系と傍系に分かれて生き延びていると云う。

正系は、後村上天皇―長慶天皇―後亀山天皇―良泰（ながやす）親王の系譜である。良泰（ながやす）親王は、南朝の崩壊とともに関東に落ちのび、江戸時代まで水戸藩の庇護を受けた。これが熊沢天皇家として登場してくることになる。傍系は、尊良（たかなが）親王（東山天皇）―守良（もりなが）親王（興国天皇）―興良（おきなが）親王（小松天皇）―正良（まさよし）親王（松良天皇）の系譜である。傍系の正良（まさよし）天皇には、兄の美良（よしなが）親王、弟の光良（みつなが）親王という二人の皇子がいて、美良（よしなが）親王は、三浦佐久姫を妻として三浦藤太夫と名を変え、現在の愛知県豊川市に移り住んだ。これが三浦天皇家として登場してくることになる。

頼山陽史観によると、１３９９年の応永の乱後、１４００年、南朝系の皇子光良親王（後醍醐天皇の皇子尊良親王から５代正良親王の皇子）が大内弘茂に連れられて吉野から長門国の麻郷に下向（亡命）してきていると云う。この時の周坊の状況が次のように記述されている。

大内義弘（弘茂の兄）は、幕府の依頼により南北朝の和解を周旋した。義弘が南北朝の間を取り持ったのは、彼が南朝の徒党と近い関係に有るのを見込まれたからである。南北朝末期や室町時代の南党は土地に固着しない賊党的乃至海賊的稼業を行って渡世する外無くなり、南大和の天険に出入りしながら広い連絡を各地と保った様で有る。

当時、内海の海賊も漸く大内氏の統御に入りつつあり、明徳の乱（1391 年）後は、紀伊・和泉の賊党も同様の関係に入って来たのでる。南北朝の合一も、大内氏の豪強も、その不可解と見られる反幕的画策も、共にこうした反逆児的な南党と結びついた因縁を無視出来ないと思われる。（福尾猛市郎『大内義隆』日本歴史学会編）

江戸３００年間、長州藩は、この皇統を秘匿しつつ養い続けた。かくして、幕末に俄かに登場してきた大室家は、１７９４年から始まり、出自は南朝後醍醐天皇の玄孫・光良親王の末裔で、光良親王が１４００年に吉麻郷に亡命してからの株別れの家系で、この時点で２３代５００年以上続いている朝家ということになる。つまり、南朝の皇統を継ぐべきものとしては、大室天皇家、三浦天皇家、熊沢天皇家の三つがあるということになる。

但し、大室家の皇統譜について、大室近祐氏が、地家の西円寺の過去帳を調べて次のように疑問を発している。

概要「大室家は１８００年頃（文政時代）に麻郷家から分岐し、大室文右衛門を名乗ったところから始まる。２代目の頃、大室家は村の大庄屋となり家が繁栄した。同じ頃、頼山陽によって大室家の家系図が整備された。２代目は子供に恵まれず、大室又兵衛の息子大室弥兵衛が文右衛門の娘ハナと結婚し大室文右衛門家（大室本家）の養子に入って大室本家３代目として家督を継ぐ。ハナと弥兵衛との間に子供が２人できたがどちらも早死にした。大室家として判明するのは１８００年頃からであり、『この時点で、大室家が光良親王（１４００～）から２３代５００年以上継続している』は確証が無く粉飾である」。

【大室寅之祐の父母】

後に即位して明治天皇となる大室寅之祐の本当の父親は、作蔵（生年月日は不明～１８８７．４．２４日）である。元々は苗字も無い海賊某の息子であったが、地家吉佐衛門（１８４０．３．１２日没）の養子と成り、地家姓を名乗ることになった。「地家」の名前の由来は「村の中心」と言う意味とのことである。地家作蔵は、田布施町麻郷地家に住み着いた。

作蔵は、廻船業者で明治２０年に死ぬ迄その職に有ったと伝えられている。多い時で１５人位の部下を持ち２隻の船を使って、屋根瓦を屋根にくっ付ける時に使う粘着剤の役を果たす特殊な泥を田布施 町麻郷から愛媛迄運んで、時には大坂湾迄運び、利益を得る仕事で営んでいたと伝えられている。これは、「田布施町のタブー」とされている。

１８４３年頃、大谷家の血筋で、京都浄土真宗興正寺派の昭顥（ショウコウ）坊（照景？）が何かの理由で娘の興正寺基子（スへ。始めは末子、季子、後に基子）（１８３１．５．１～１８５５．１１．２０日）を連れて、興正寺から田布施町麻郷地家の西円寺にからやってきた。

１８４９年頃？、一代で財を成した作蔵が西円寺の東隣に家を建てる。これが縁で、そこで浄土真宗興正寺派の西円寺の寺娘のスへと知り合う。

１８４６．５月頃（１８４４年頃）、地家作蔵は満２０歳の時、スへ（満１３歳）と結婚する。

スへが満１４歳の頃、第一子（男児？）をもうけるが１歳弱で病死した。その後、夫婦の間には長女ターケが生まれる（１８４７．４．１４日誕生）。

【大室寅之祐の誕生】

１８５０（嘉永３）．１．１０日、長男虎吉が、スへの実家の西円寺で誕生している。作蔵がおよそ２５歳、スへ１８歳の時の子と云われている。この虎吉が後に寅之佑となり明治天皇になったとされる。

奇しき事に、「寅吉は１８５０（嘉永３）年生まれ、睦仁親王１８５１（嘉永４）年生まれのほぼ同じ年」となる。鹿島説が史実とすると、このことが「すりかわり」の下地となる。続いて、次男・庄吉（通名は省吉）、三男・朝平（通名は浅平、浅蔵とも）の３人の子が生まれた。

【両親の離婚】

１８５４年初頭（５月頃？）、作蔵とスへは離婚している。作蔵は、長女ターケと三男朝平を引き取り、スへが長男虎吉と次男庄吉を引き取った。スへは、西円寺の実家へ戻ったと推測される。

他方、大室弥兵衛（１８１３．６．１４日～１８７９年）は、文右衛門の娘ハナ（１８１５．１２．５日～１９０３．２．１日）との間に子供が二人出来たが、二人とも早死した（１人目は１８４９．４．１４日、２人目は１８５３年に早死）。その後、離婚もしくはハナは死亡したようである。

【母が大室弥兵衛と再婚し、虎吉は大室虎吉を名乗る】

１８５４年下旬（１０月頃）、地家作蔵と離婚したスへ（２４歳）は、１８５５．１月頃、大室弥兵衛の後妻（二号）となっている（地家朝平の孫の地 家武雄、９３歳時の証言）。これに伴い、長男の虎吉は大室虎吉に、次男の庄吉は大室庄吉と名乗ることになった。

１８５５．１１．２０日頃、大室弥兵衛とスへの間に大室寅之助が生まれたが直後、スへが死亡した（西円寺池で入水自殺との大室近祐説もある）。スへは産後のひだち悪く肺結核で死亡したと云われている。この時、寅吉（後の寅之祐）はかぞえ６歳だった。スへの位牌の法諡は「謙徳院殿叡仁基成大姉居士」とあり、浄土真宗で最高級の名前が贈られている。

【大室家の血統断絶】

スへとの間に出来た４代目になる大室寅之助も、虚弱体質で１歳数ヶ月で早死（～１８５７．６．２２日）。これにより、大室家の血統は断絶したことになる。大室弥兵衛はその後、文右衛門の娘ハナ（１８１５．１２．５日生まれ、当時４０歳？）と再々婚した。

【大室虎吉が大室家を家督相続する】

この間、虎吉、庄吉らは継母（ままはは）に育てられた。１８７９年、大室弥兵衛も死亡する。これにより、本来は地家作蔵の息子である大室虎吉と大室庄吉が大室家を相続した。

大室庄吉の子供たちは次の通り。長男・儀作（明治 19 年 11 月 23 日生）、長女・モト（明治 4 年 1 月 8 日生）、次女・タカ（明治 8 年 11 月 24 日生）、三女・ツネ（明治 11 年 11 月 1 日生）、四女・ヨネ（明治 14 年 10 月 24 日生）、五女・ツユ（明治 17 年 6 月 28 日生）、次男・音吉（明治 22 年 9 月 26 日生）。

他方、地家作蔵に引き取られた三男地家朝平の子孫は、山口県田布施町に現存して居る。